

高齢者孤立化 浮き彫り

京都市伏見区に向島駅前まちづくり協議会は、向島ニュータウンの入居者を対象にした生活実態アンケートの結果をまとめた。1人暮らし世帯が全体の2割を超え、半数が終日外出しなかったり、4分の1が一日中話さない日があり、孤立化の不安がある団地住民の生活が浮き彫りになった。

同ニュータウンは1977年から入居が始まり、少子高齢化が進んでいる。健康福祉のまちづくりを考える資料にしようとしてアンケートを実施。1月に約4300戸に配布し、回収率は35・8%だった。京都文教大の小林大祐講師が分析した。

向島ニュータウン 生活実態調査結果

22%、2人は47%だった。品の修理が42%と最も高
「一日中話さないことが、通院の送迎23%、買
ある」と回答したのは28%、物支援18%などが続い

1人暮らし2割、終日外出せず5割

安心して暮らせる町 望む声

「一日中出かけない」が、
「複数回答による生活」では「犯罪や災害で安
の困りことでは、家電製心」「元気な高齢者が住

める町」などという意見が多かった。

自由記述では「引越したいが、経済的に厳しい」「ミニミニターセ
ンターや駅前に交番が欲しい」という声があった。

協議会の福井義定会長(71)は「1人暮らしの増加など、予想していた状況が数字でも裏付けされた。この結果を生かして、各街区こ
とに勉強会を開くなどして、まちづくりを考えたい」としている。

(山下悟)

中国人看護師が急増

中国を中心と少なくとも217人の外国人の若者が日本の看護師国家試験に合格し、民間の病院で働いていることが朝日新聞の調査でわかった。深刻な看護師不足を背景に、国内のNPO法人が中国の大学などと病院側の橋渡し役になり、3年ほど前から急増。経済連携協定(EPA)で来日したインドネシア、フィリピン人看護師(96人)の2倍を超えた。

▼2面Ⅱ好待遇めざす

NPO、来日を橋渡し

国籍別では、中国183人、ベトナム30人、韓国4人。勤務先の病院は、大半が首都圏か関西だ。NPOは、朝日新聞が確認できただけで首都圏に3、関西に1。この4法人が217人のうち212人を病院側に紹介した。残り5人は病院側が独自に探し、雇用していた。4法人のうち3法人(東京都、京都府、埼玉県)は2006、09年に設立され、中国からの受け入れを本格化させている。

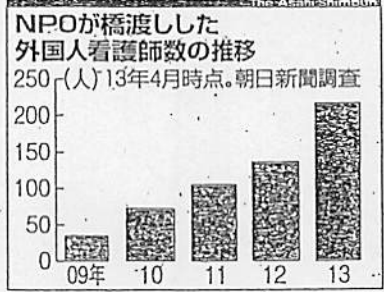
NPOが紹介した中国人の国家試験の合格率は70〜90%と、日本人に迫る。一方、EPA枠では、08年から今春までにインドネシアとフィリピンから6人、

29人が来日したが、合格率は10%前後と低迷している。NPOの仕組みで共通するのは、手厚い日本語学習支援だ。現地の医科大学

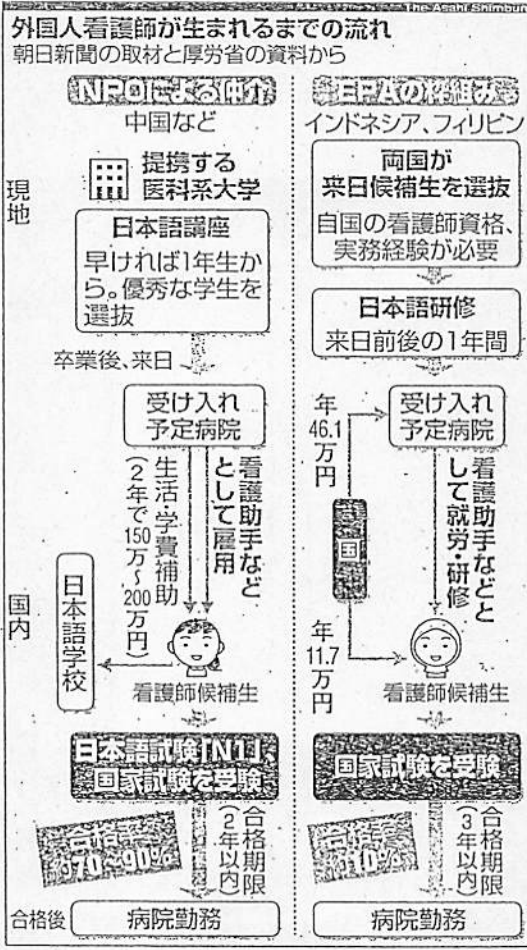
た。

NPOが中国を主な対象にするのは現地大学からの要請があり、同じ漢字圏で日本語を習得しやすいから

だ。NPOは病院からの寄付などで運営されている。



語学習得も支援



と提携し、大学に日本語講座を設け、優秀な学生の中から来日候補生を選別。来日後は、受け入れ予定の病院が日本語学校に通う費用を援助する。看護師助手として雇用するなどし、生活面でも支える。

ただし、EPA枠の候補生より厳しく、国家試験の2年以内の合格が求められる。NPOは病院からの寄付などによって運営されている。

一方、EPA枠では、来日後に1年間の日本語研修(10年度までは来日後、半年)が義務づけられているだけで、日本語能力試験を受験する必要もない。日本語学習の経費など、国の支援態勢も十分とはいえず、日本語力の不足が指摘されている。

厚生労働省看護課は中国人看護師が増えていることについて、「日本の国家試験に合格しているのに、日本人看護師と分け隔てることはしない。医療現場でのトラブルも報告されていないので、実態調査は考えていない」としている。

(神元敦司)

紙面から

ミニデイで「安心して老いを」

中国残留孤児1世と配偶者対象の通所事業「ミニデイサービス」が、京都市伏見区で始まった。京都府内では初めて。高齢化に直面する1世らに、「安心して老いる環境を」と子や孫、支援者らがボランティアで独自に立ち上げた。



着目

楽所

見聞

2012年(平成24年)9月2日 日曜日

第3種郵便物認可

言葉、習慣の違い施設なじめず 残留孤児1世に 手作りの介護



ミニデイサービスで健康体操を楽しむ中国残留孤児や家族たち。中国語が飛び交い、明るい雰囲気だ(右から京都市伏見区小栗栖「白寿」)

中国残留孤児の1世と配偶者を対象にした通所事業「ミニデイサービス」が、京都市伏見区で、京都府内では初めて始まった。終戦から67年を迎えて高齢化に直面する1世らに、「安心して老いる環境を」と子や孫、支援者らがボランティアで独自に立ち上げた。背景には、言葉や生活習慣の違いから、既存の福祉サービスでは十分に対応できない事情がある。(辻智也)

伏見区小栗栖の老人保健したり、健康体操を楽しみ、伏見区は足が不自由施設「白寿」。6月24日、だ。司会進行はほとんどで、座ったままの参加だ。1世や家族、支援者ら約40人。会場には中国語の冗談が、「やっぱり言葉が人が集まった。1世が鮮やかに笑い声が飛び交った。通じる」と明らかな衣装を着て舞踊を披露。1世の大熊孝枝さん(71)笑った。約20年前に帰国し、

伏見で府内初 2世らが通所事業

フカロー
アップ
2012

中国残留孤児 第2次 年代後半から90年代にかけて 帰国が相次ぎ、全国で約2500人が永住帰国している。家族も含めた中国帰国者は約6600人になる。

現在は1人暮らし。これまで一般のデイサービスを利用したが、周囲と言葉が通じず、その後は「食事が慣れない」と利用を拒んだ。1世の多くは高齢者の前に夕日のように美しい老後を送るという思いを込めて、2世の芦田博美さん(47)は、ホームヘルパーの資格を取得し、会の運営区向島でも取り組みを計画している。

中国語で対応人材不足

京都府福祉・授産課によると、府内の中国残留孤児1世とその配偶者は計約200人。平均年齢は70代前半で、介護保険の要介護や要支援に該当する人は約40人いる。今後、支援を必要とする人は確実に増える。既存の福祉施設に中国語を話せるスタッフはほとんどおらず、人材育成を求める声が上がっている。

1世と配偶者も、介護保険制度に基づき福祉サービスは受けられる。しかし、1世らに特化した介護保険事業は、全国でも中国残留孤児の帰国者数の多い東京都と長野県に通所施設が1カ所ずつあるのみだ。

長野県飯田市で、2005年から1世を対象にしたデイサービスを実施する「宅老所ふれあい街道ニイハオ」で

本語ができずばかりにされることと自宅にこもり、介護が必要になった。「気軽に交流し、いつまでも元気でいてほしい」と話す。

施設開所が資金面から現実的でないため、同会は施設を借りて月1回、交流や介護予防の場として事業を続けている。1世の多い伏見区向島でも取り組みを計画している。

伏見区小栗栖では、親の世代を支えようと、3年前から2世や3世が日本語教室で福祉や医療用語を勉強し、ホームヘルパー資格の取得を進めてきた。しかし、資格を持つ2世、3世は市内で10人程度で、人材は不足している。

夕陽紅の会は、帰国者を支援できるヘルパーの養成を進める考えだ。牧田華文会長(45)は「中国語や1世の背景を理解するスタッフが多くの施設にいれば、1世は安心してサービスを受けられる」と話している。

熱情中国に看護師へ越え海

中国人の若者が日本の医療現場で看護師としての第一歩を踏み出している。中国の大学は送り出しに積極的で、日本の看護師不足を背景に、今後ますます増えそうだが、厚生労働省は実態調査を求めている。外国人の手を借りずによつていけるのかどうか国は検討を始めるべきだ、との指摘もある。

「人見知りするので、(配属先の)病棟に慣れることができないか心配」。京都市伏見区の武田総合病院(500床)で4月上旬にあった中国人看護師の新人研修。今春、国家試験に合格したのはかりの江蘇省出身の姚紅偉さん(25)は、先輩の中国人看護師らに打ち明けた。

「言葉の壁があり、難しいところもあるかもしれない。でも、笑顔で忘れずに頑張る」。同郷で、看護師2年目の劉麗さん(26)が励ました。

同病院には日本人を含め37人の看護師がいる。中国人は10人で、うち新人は姚さんら2人。研修には、系列病院からも4人の中国人の新人が参加した。姚さんの配属先の内科病棟には、約50人の入院患者がいる。「いちに、いちに、って声に出して」「しんぞくはない?」脳疾患で一人で歩くのが難しい高齢男性の歩行練習につき添う。男性は「話をきいてくれる。日本人と何ら変わらない」とほめる。

姚さんは4年制大学・安徽中医学院(安徽省)の1年生の時、「日本語を学ぶ講座の説明会がある」と大学から知らされ、軽い気持ちで参加した。説明会には、京都市伏見区の

好待遇めざし 日本語勉強 中国語猛勉強



患者の歩行介助をする姚紅偉さん(右)＝京都市伏見区の武田総合病院、林敏行撮影

NPO法人「国際医療福祉人材育成機構」のスタッフもおり、日本で看護師として働けば月給は30万円、と教えられる。中国の大病院の3倍に上る。日本語の講座は週に2、3回、大学の講義が終わってから夜まで2、3時間続いた。

同期9人で2010年7月に来日。武田総合病院で看護助手として働きながら京都市内の日本語学校に通い、2度目の挑戦で今年3月25日、看護師国家試験に合格した。昨春、不合格の際は、寮で一晩中泣き明かした。日本人の看護部長に「恥ずかしい。もつこの病院にいられない」と手紙を渡した。部長から逃げたためと諭された。

また看護記録を日本語でまとめるのが難しい。中国にはないカタカナも苦手だ。武田総合病院との契約期間は3年で、更新もできる。でも、将来は帰国して結婚したいという。

姚さんの実家は、南京市からバスを乗り継いで3時間半の農村。日本での生活費を切り詰めて、両親にお金を渡してきた。これまでに200万円ほどになる。実家は、平屋から3階建てに新築された。

日本の病院には、経済連携協定(EPA)に基づいて働くインドネシアとフィリピン人の看護師もいる。

関東地方のある中堅病院は4年前、インドネシア人の看護師候補生を2人受け入れた。1人は国家試験に合格したが、別の1人は不合格で帰国した。院長は「漢字圏でない候補生が、試験に合格するのに必要な日本語力を身につけるのは難しい。EPAは効果がない」と話す。今春、初めて中国人の女性看護士(27)を1人採用した。東京、都内の日本語学校から紹介された。院長は「中国人を雇用するルートが開拓できた。年に1人

熱過日本 合い奪い手

国は復職支援に注力

中国からの看護師候補生の受け入れが急増する背景には、日本の診療報酬制度の改定と外国人医療従事者の在留資格の撤廃がある。厚生省は2006年、入院患者7人に看護師1人とする「7対1」の配置基準を新設。手厚く配する病院ほど診療報酬が増えるため、それまでの「10対1」から切り替える病院が相次いだ。看護師の引き抜きや取り合いが激しくなり、深刻な看護師不足に陥った。

その一方で法務省は10年に、出入国管理法の省令を改正し、外国人医療従事者の在留期間を7年以内とする制限を撤廃。長期就労が可能になった。厚生省は看護師不足対策として子育てなどで職を離れた潜在看護師の復職支援や、離職を防ぐための病院内保育所の開設などに、都道府県を通じて補助金を出している。55万6655人いるとされる潜在看護師の掘り起こしに努め、EPA枠以外の外国人看護師の確保に力を入れる予定はないという。岐阜県内の公立病院の元看護部長は「電子カルテ化が進み医療機は日進月歩で変わっている。現に戻ってきて欲しい」と語る。

法人の川口真理事は「看護師不足の問題に対し、政府は責任感がないと感じる。今は都市部中心だが、今後は地方の病院に外国人看護師を紹介できるようにしたい」。中国・大連市の大連医科大学は日本語講座を受講する学生を40人から160人に増やす計画だ。国際交流責任者の趙紅偉さん(46)は「中国でも高齢化が加速度的に進む。日本の先進看護を学び、中国に帰ってきて欲しい」と語る。

は確保したい」と言う。この看護師はNPOに頼らず、自力で来日。中国で看護師の経験があり、1年目で日本の国家試験に合格した。「日本の漫画が好き。同じ漢字でも、患者さんの名前が読み方が違うのが難しい。日本で何でもできる看護士に早くなりたい」。ほほ笑みながら話した。(神元敦司)

(座談会) 地域福祉の現場から(1)

～喫茶・会食事業を通じた「寄り場」の意義～

東九条地域の福祉の現場から、地域の高齢者の状況や事業の連携などをご紹介していきたいと
います。今回は、喫茶や会食などを通じて気軽に高齢者が立ち寄れる場を提供しているエルファ、
まめもやし、希望の家の三団体に集まってもらいました。今号では前篇をお届けします。

ちおんみよんえ

■エルファ・鄭明愛さん：エルファでは、作業所の一環として、喫茶を始めました。近所の
人が来てくれたらと思って。地域の高齢者が来ています。交流のためのサロンというより、
喫茶店なので、飲み物だけでも頼んでくれる人はいます。仲のよい人たちが喋る場所になっ
ていますね。お年寄りの人間模様がよく見えます。土曜日もやっているの、「故郷の家」
の利用者や家族が来ることもあります。人気メニューは、ピビンパですね。食数としては、
15食ぐらいかな。人気メニューのときは20食を超えます。比較的自由に運営しています。
作業所の人がよく喫茶を利用してきていて、時間帯は8時半～16時までやっています。
作業所の利用者で一人暮らしの方は、朝食などをよく利用してくれていますね。デイサー
ビスもしているので、洛西、洛北、南京都など各デイサービスから来る「カフェレク」も
できて、よい交流になっていますよ。

■まめもやし・村木美都子さん：まめもやしでは、東松ノ木市営住宅の地域集会所で会食と
いこいの場を持っています。それから、常時、管理事務所のスペースを活用して、喫茶も
しています。団地住民が対象で、会食の対象は当初の在日一世だけでなく広がってきてい
ます。デイサービスとは違って気軽に寄れるかな。認知症の方や元気な人も一緒。元気な
人がその人の症状を分かってもらえる場にもなっています。会食は300円という手軽さが
あり、自治会との連携のもと、やっています。

■希望の家・村田牧子さん：希望の家では「にこに
こや」という名前で、毎日（月～金）、喫茶スペ
ースをやっています。利用者は30人ぐらいですかね。
食パンは50円、コーヒーは100円です。朝食を食
べて、昼前に帰っちゃう人もいますし、同じメン



バーが多いこともあります。朝の9時半から15時まで。施設が新しくなったことで、来てくれる人が増えました。特養の人がお茶を飲みに来たりしてくれます。近くの形成外科のデイサービスの人が来ることもあります。よい交流の場になっていると思います。常連さんが初めて来た人に「また来てや」と言ってくれたりもします。エルファのデイを利用している方で、ご家族と一緒に来てくれている人もいますよ。近所の若い人もたまに来ていけるかな。デイサービスと違って、しんどいときは帰ることができるし、気の合わない人がいるときも帰れますしね（笑）。デイには行きたくないけどという人も来られます。やっぱり居場所になっていますね。普段はただ喋っておられるだけですが、月に1回、誕生日会をやっていて、ケーキづくりの上手なボランティアさんが来てくれます。こちら側が提供することが多く、来ている人が自主的に何かをするというところまではないですかね。

■■喫茶・サロンスペースは高齢者にとって気軽に寄れる場所

村田：希望の家では、ボランティアが話し相手として入ってくれています。話題をふってくれるんです。

村木：喋る人同士はよいけど、そうでない人は孤立するので横についてあげたりしますね。

村田：男の人は5、6人ですが、友達同士ということではなくって。ボランティアは教会関係とその友だちや学生など、毎日入ってくれているのが大きいです。

村木：ランチの値段は300円が限界です。他の人におごってあげられる金額としてはこれくらいかな。

村田：病院やデイで新たな住民さんを誘ってくれているのが大きいです。

村木：地域のデイや特養とか（施設の人）来てくれるのはよいですね。

鄭：エルファでは、デイサービスの一つのプログラムとして、喫茶に来てお茶を楽しんだりもします。ときには、友だちに再会されたりもします。作業所の利用者が一番多いです。ランチを作る担当者はいます。2006年から作業所としてスタートして、喫茶スペースには「成望館」の商品を置いたり、スタッフが手話ができることを聞きつけて聴覚障害の人が来てくれたりもします。喫茶スペースはライブコンサートなどにも開放していて、作業所の利用者さんで音楽活動をしている人が、朝鮮語の曲を作って、「エルファタリヨン」などもしていますよ。

【前篇終わり・次号につづく】

登録団体を通して感じるネットワークサロンのつながり

私は、希望の家の高齢者交流室「にこにこや」でボランティアを月に数回しています。地域のお年寄りたちや地域の役員さんが生き生きとしておられる姿に元気を頂いています。普段は、ネットワークサロンの登録団体の一つである柳原銀行記念資料館のスタッフをしており、被差別部落の歴史や文化を紹介しています。



第6回世界の料理教室アイヌ篇（2012年3月）

今年の春には、企画担当として「アイヌ・ネノアン・アイヌ～人間らしい人間」という企画展を開催し、ネットワークサロン主催の「世界の料理教室」の一環としてアイヌ料理の体験と、刺繍体験を共催することができました。その成果もあり、今まで参加してきたアイヌ・沖縄を考える会という団体も、登録団体の一員になることができました。41ある登録団体の中でも、反貧困ネットワーク・京都や京都暮らし応援ネットワーク、きょうと労働相談まどぐちなどにも参加しており、4月に行われた東九条春まつりの時には、様々な団体の活動を知ることができました。ネットワークサロンを通じていろいろな連携が生まれていく場に立ち会えることに、魅力を感じています。

（木村 理恵）

高齢者の在宅生活を支える知識と技術

～第3回・第4回ボランティア講座～

報告②

第3回ボランティア講座は、高齢生活研究所所長・むつき庵代表の浜田きよ子さんを講師に迎え、「高齢者の在宅生活を支えるために必要なこと～暮らしと道具を支える工夫」を開催しました（9月8日）。生まれ育った西陣で経験した父親の在宅生活支援を通した「道具を工夫する知恵」に関心させられました。第4回は、「介助実技講座～あなたとわたしにやさしい身体介助」を行い、崇仁デイサービスうるおい・高齢サポート下京東部を講師に迎え、高齢者の身体的な状況に合わせた車いすを中心とした介助知識を体験を通して学び、東九条地域の福祉活動を支えるボランティアのニーズに合わせた、企画を実施することができ、高齢者の在宅生活を支える知識と技術を向上させることが今後必要です。

（山本 崇記）